

『やさしい猫』

2021年12月13日

外国人の不法就労やオーバースティの人を收容する入管行政は人権を著しく疎外していると、雑誌や新聞でしばしば報道されていた。苦痛に耐えかね自殺者も出、抗議のハンガーストライキをする人もいる。また、教会関係で、支援活動をしている話も聞いていた。この問題でクローズアップされたのは、スリランカ人のウィシュマ・サンダマリさんが入管で死亡した事件であった。妹さんたちが来日し、姉の死の状況を問い質そうとしたが、入管は情報提出を拒み、出したものも一部に過ぎなかった。報道によれば、極めて人権を貶める対応であつたらしい。遺族は、殺人容疑で告訴状を出し、受理されていると聞く。日本は、外国人の来日に対して門戸を狭くし、不法就労やオーバースティの人を強制送還している。また、難民認定の基準が厳しく、世界から緩和するように指摘されている。外からの流入には警戒心が、異常に強いということである。

中島京子氏の『やさしい猫』を読んで、入管の頑なな事態を垣間見ることができた。「やさしい猫」というのは何であるのか、気を引かれたが、スリランカの童話で、下記のようなストーリーである。3匹の子ネズミの父親が餌を捜しに出て行くが、猫に食べられてしまう。母親ネズミが、餌を捜しに出て行くが、同じく猫に食べられてしまう。残された3匹の子ネズミは猫に出会い、両親が食べられたと言うと、猫は同情し、自分の子ネコと一緒に可愛がって育てるようになった。猫がネズミを可愛がるなどあり得ない話であるが、強い者が心を入れ替え、弱い者を守ることを諭した寓話のようである。

小説の主人公は、夫を亡くしたシングルマザー「ミュキ」の一人娘「マヤ」である。彼女が5歳くらいから高校生までに体験したことを、彼女の目線から描いている。

母ミュキは、幼児教育に携わる仕事をし、被災した福島にボランティアに行き、そこで、8歳年下のスリランカ人「クマ」と出会う。数年過ぎ、東京で、ミュキとクマは偶然出会う。二人は懐かしがり、交流が始まる。クマは18歳の時、来日し、日本語を学び、自動車修理工として働いている、真面目な青年であった。ミュキが病気になった時、クマは献身的に支える。主人公マヤもクマになつき、良い関係になる。クマはミュキにプロポーズするが、ミュキは年が違う、子どもがいるからと受け入れない。しかし、次第に好意を持ち、一緒に暮らしたいと思うようになり、結婚を決意する。ところが、クマは自動車工場から解雇され、滞在ビザの期限が切れてしまう。ミュキはクマの苦悩と、ミュキと娘に対する優しさを知り国際結婚手続きをする。結婚したことを入管に報告し、滞在ビザを取ろうと、申告に行く途中、職務尋問され、オーバースティが発覚し、入管に拘束される。入管での生活は、病気をしても顧みられず、救急車が来ても追い返されてしまう。入管で亡くなったウィシュマさんと同じように、人権などは全く認められず、動物のように扱われる。クマは心も体も疲弊してしまう。入所後、6ヶ月以内ならば、裁判ができると聞き、手づるを得、よい弁護士と出会い、ようやく裁判ができることになった。入管側は、強制送還しようと、滞在ビザを得るための偽装結婚だと言い続ける。滞在ビザを勝ち取るのは1~2%くらいしかないが、3人の培ってきた家族愛の歴史を克明に証言していく。裁判の過程は、迫力があって、小説の山場である。裁判長は、二人が愛し合う夫婦であることを認め、滞在ビザの交付を認めた。ミュキは懐妊し、男児を産んで、ハッピーエンドで終わる。

日本は外国人に対し、偏狭であることを問いかけた小説で、外国人を受容するのは、摩擦はあるが、自分を大きく成長させることではないかというメッセージとして受け止めた。